

同調・同化と排除の力学

木下光生(奈良大学教授)

自己責任と排除・差別
—近世日本の貧困史と賤民史から—

平山昇(九州産業大学准教授)

「体験」と「気分」の共同体
—20世紀前半の伊勢神宮・明治神宮参拝ツーリズム—

趣旨説明

近年、米国トランプ政権に代表されるように排外主義的な論調が台頭し、国籍や人種、宗教を異にする人々に対する排他的言動が世界を覆いつつあります。また国内に目を向けても、他者・国民を敵と味方で区別し、自らの政治的立場への同調を強要する安倍政権や、貧困を「自己責任」と断じ生活困窮者への冷淡な視線を浴びせる為政者・社会など、国民内部における同調圧力と他者に対する差別・排除の「空気」は現代においてより深刻な問題となっているように見受けられます。

そこで今回は、近世村落社会における貧困救済のあり方を分析されている木下光生氏、戦前の神宮参拝を題材に日本人像への同調の「空気」が形成される過程を分析されている平山昇氏を講師にお迎えしました。お二人の講演を通じて、現在に至るまで人類がとらわれ続けている「同調・同化と排除」という課題に対し、歴史学的に向き合い、現況を捉え直す場にしていきたいと思います(お二人の講演内容は裏面の要旨をご参照ください)。

◎日時 2019年3月17日(日)14:00~17:30(受付開始13:30)

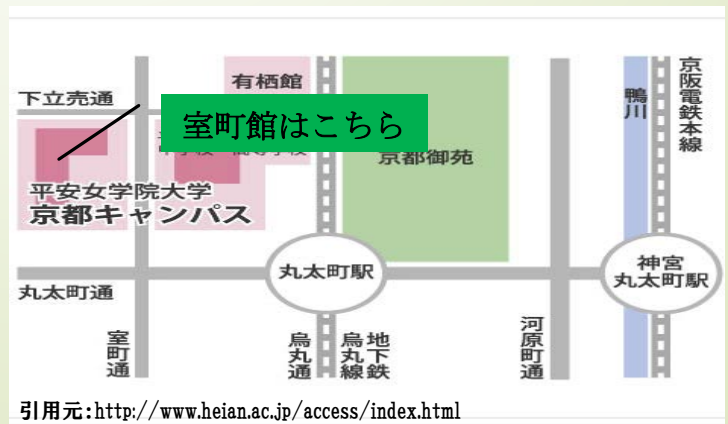
事前申込不要・会場整理費500円。一般来聴歓迎

◎会場

平安女学院大学京都キャンパス
室町館4階 412教室

※アクセス

市営地下鉄烏丸線丸太町駅
市バス烏丸丸太町停留所
下車、徒歩5分(右図参照)



引用元:<http://www.heian.ac.jp/access/index.html>

お問い合わせ:日本史研究会 075-256-9211

URL:<http://www.nihonshiken.jp/>

Twitter:@nihonshiken1945

◎講演要旨

自己責任と排除・差別 —近世日本の貧困史と賤民史から—

木下光生(奈良大学教授)

「自己責任」なる言葉が、日本社会のなかで蔓延するようになったのは、この二十年ほどの新しい出来事である。だが、「真面目に働いていない」ことを理由に、ある者を見捨て、排除、蔑視する動きは、歴史上に根深く存在する。本講演ではこの問題を、近世日本における貧困史と賤民史の視点から追っていきたい。近世の村社会では、生活に困った村人をみなで助けようとする一方、「貧しくなったのは、おまえの努力が足りないせいだ」として、公的救済を発動せず見放したり、発動するにしても強烈な制裁を食らわしたりしていた。また18世紀後半以降になると、賤民たちを「真っ当に働いていない」人びとと決めつけ、暴力や暴言で、彼らの存在価値を否定する動きも顕在化する。しかも深刻なことに、こうした「自己責任」的な価値観は、排除・差別される側にも共有されていた。このような歴史的経験が、21世紀日本をどのように規定していくことになるのか、考えていきたい。

「体験」と「気分」の共同体 —20世紀前半の伊勢神宮・明治神宮参拝ツーリズム—

平山昇(九州産業大学准教授)

「体験すればわかる／しなければわからない」——この素朴な「身体」重視の理屈に対抗することは往々にして至難の業である。本講演では、明治末期に立て続けに生じた天皇をめぐる「身体」「感情」の興奮状況(大逆事件、明治天皇平癒祈願、乃木殉死)が一過性のものとして雲散霧消するのではなく、伊勢神宮・明治神宮参拝ツーリズムという身体的「体験」の共有拡大回路と結びつき、やがてこの「体験」とそこから得られる「気分」に馴染めない人を理屈抜きで排除する「空気」が生じていった過程を明らかにする。

この過程は、「言論(教育)の大衆化」と「移動(旅行)の大衆化」が前提となった。インターネット革命によって誰でも言説を発信できるようになり、また、伊勢神宮(式年遷宮がおこなわれた2013年に過去最高の参拝客数を記録)への参拝など内向的・自己満足的な「日本人」心情を資源としたツーリズムが活発化しているという現代の状況について考える手がかりにもなるだろう(ちなみに、東京オリンピックが開催される2020年は、明治神宮創建百周年でもある)。